



TITLE:

Holonomic Quantum Field解説 (超 函数と線型微分方程式 V)

AUTHOR(S):

三輪, 哲二

CITATION:

三輪, 哲二. Holonomic Quantum Field解説 (超函数と線型微分方程式 V). 数理解析研究所講究録 1977, 287: 49-52

ISSUE DATE:

1977-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/106131>

RIGHT:

"Holonomic Quantum Field" 解説

京大教研 三輪哲二

holonomic quantum field という題は前例がありませんが、場の理論に現われる多変数特殊函数を, holonomic system, すなわち解空間が有限次元の偏微分方程式系で統制しようというのが我々の目標です。

統計力学における磁性体の模型に Ising 模型というのがあります。Onsager は 1944 年に平面正方格子の格子点を (i, j) とし, ± 1 の値を取るスピン変数 σ_{ij} が与えられている時に, あらゆるスピンの配置についての和

$$Z = \sum_{\sigma} e^{\frac{1}{kT} (J_1 \sigma_{ij} \sigma_{ij+1} + J_2 \sigma_{ij} \sigma_{i+1j})}$$

を計算し, 転移点が存在する事を示しました。1976 年になって References の [4] 及び [5] によって 2 点相関函数

$$\langle \sigma_{00} \sigma_{MN} \rangle = \frac{1}{Z} \sum_{\sigma} \sigma_{00} \sigma_{MN} e^{\frac{1}{kT} (J_1 \sigma_{ij} \sigma_{ij+1} + J_2 \sigma_{ij} \sigma_{i+1j})}$$

及び, 転移点 T_c の上下からのスケール極限 ($T - T_c$ 及び格子間隔を, その比を有限に保って, 0 に近づけた極限における値) が計算されました。

Onsager は、2次元格子を1次元格子の積み重ねと考え、 Z を、格子の大きさを $size$ とするある行列のべきの $trace$ と書き換え、次に反交換関係を満たす補助変数を使って、その行列を対角化するという方法で解きました。これは、考えている空間が Minkowski 空間と Euclid 空間という事の^(*)違いを除いて非常によく似ています。事実 [4], [5] の結果 (転移点の上からの極限) を Fourier 変換し、さらに Wick 回転 (Euclid 空間から解析接続して Minkowski 空間に移る) してやると、得られた2点函数は、質量 $m > 0$ の中性スカラー粒子の2点函数の持つ特性を備えている事がわかりました。そこで、Onsager 及び [5] の方法を徹底してスピン変数 S_{MN} あるいは場の演算子 $\varphi(x)$ を free fermion の補助変数 (場) で表わし、それによって n 点函数を計算する事が出来ました。その結果が (7), (8) 及び (12) (13), (14) です。(格子の場合は追って)^{*2}

この結果で特徴的なのは、 \exp の肩に補助場の2次形式がのった形の $normal$ 積になっている点で、その背後には直交空間 W 上の Clifford 群の元 g が W に引き起こす直交変換を知れば、 g 自身の表示が (3) の形で得られるという数学的事実がありました。そこで、 $\varphi(x)$ も Ising 模型の極限という事を離れて、ディラック方程式の解の作る

直交空間で、点 x の片側の値を (-1) 倍するという直交回転 (6) を引き起こすものとして直接構成する事ができました。この形では、 $\varphi(x)$ の Lorentz 共変性、局所因果律も明らかになります。さらに、直交空間の代わりにシンプレクティック空間を考える事により、free boson を補助場とする別の模型が構成できました。それが (9) と (15) です。

$\varphi^F(x)$ については、場の理論の LSZ 型式により $t \rightarrow \pm\infty$ の漸近場を計算する事によって、漸近場を補助場を使って (1) の形に表わしました。これから S 行列が簡単に求まって粒子数 n が保存され $S_{n,n} = (-1)^{\binom{n}{2}}$ である事がわかりました。 S 行列は 1 ではないけれど、場の理論において 1 でない S 行列を持つ例が具体的に計算されたのはこれが始めてです。さらに始めの目標である τ 関数の holonomy 構造を調べると、内点のない Feynman グラフに対応する Landau 特異点にのみ特異性を持つ事、及びそこにおける特異性の位数が、通常予想される値より、多重線の存在により (16) の形にずれる事がわかりました。

以上が今回の論文の内容です。ここまでの結果では、holonomic system が §4 の最後を除いて現われませんでした。現在 (1977 年 2 月)、2 点函数の場合の [4] における Painlevé 超越函数による表示を、 n 点函

数に拡張する方向で, *holonomic system* と直接結びつけて研究しています。

＊場の理論に

＊ [3] に結果は述べられている。

(以上は本講究録掲載の英文の論文を, 学士院紀要に投稿する際に, 吉田耕作先生にお渡しした手紙の一部です。数学の方の参考になればと考えて, 吉田先生のお許しを得て, ここに載せる事にしました。)